

「神経衰弱」と生きる
漱石の歩んだ道のり

立命館大学応用人間科学研究科
臨床心理学領域

夏目漱石（1867 - 1916）は、我が国の近代文学を代表する作家であるが、その作品が文学の領域から論じられているだけではなく、漱石自身について、傑出人の精神症状とその創造との関連を考察する病跡学の領域からも検討されている。病跡学上に漱石が検討されているのは、彼の作中に「神経衰弱」的要素が頻出し、その生涯に精神の変調が度々見られたことによる。

漱石の精神変調については、鏡子夫人の回想録『漱石の思い出』を基礎資料として知ることができるが、それによると、明治27、28年頃（第一期）、明治35年から40年頃（第二期）、大正元年辺りから始まり3年を極期として、5年に没するまで時々起こったもの（第三期）の3回認められ、その内容は、妄想と幻聴であったと推察されている。

漱石は、第一期に執筆活動を始め、第二期は当時の大御所作家として活躍しているが、本論文では、漱石を「神経衰弱」を抱えた人と捉える前提に立つ。

第二期の作品である『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』を分析すると、「神経衰弱」が自己の中から起こるものだと認められずに、一貫してその原因を外に求める様子が窺える。また、「神経衰弱」そのものの苦しさから逃れるために、『漾虚集』や『草枕』における美的世界の表現によって、現実世界から精神を遊離させる試みが見られる。

第三期における漱石は、「自分の心理現象の解剖」を行い始め、その結果、作品上での「神経衰弱」に対する認識も深まって行く。

『行人』では、執筆という作業を通して自らの「神経衰弱」と付き合い、その解明を試みるが果たせず、続く『心』では、「神経衰弱」の苦しみから逃れるために観念的な死を体験し、創作上に完結している。そして、『硝子戸の中』でしばし中空を漂うが、それは、「神経衰弱」とともに生きる道筋への気付きの萌芽と言えるものであった。その後『道草』では相対性への魁が見られ、未完の大作『明暗』においては徹底的に相対世界の中で生きることが目されるが、それは、真の意味で「神経衰弱」を受け入れるために、漱石が見出した生き方の表現であったと考えられた。